今回私は、先生の平和への深い理解がここに源をもつものであることを知って、一層、荘司雅子先生への敬慕の念を深くした。先生ご自身が、異文化のなかにあって、愛と和解への内心の戦いをしておられたからこそと知った。

私はあらためて、荘司雅子先生が二十世紀の幼児教育を背負って生きられたことを意義深く思う。

荘司雅子先生葬儀式辞

―平和教育の源流―

森澤　一由

荘司雅子先生は、一九〇九年、当時日本の統治下にあった台湾の嘉義で尚家の十人きょうだいの四女としてお生まれになりました。ご尊父は人々から尊敬されていた儒学の教授でした。幼児期に厳しい躾と教育を受けられました。当時台湾人と呼ばれた人たちが日本で高等教育を受けるのに

は、台湾総督府の特別試験に合格して奨学金を得ることが必要でした。荘司先生はその難関と言われた試験に合格し、教育者として歩む決意をして、当時の奈良女子高等師範学校に入学されました。その時代に特に注目すべきことは、先生が奈良ホーリネスキリスト教会で洗礼をお受けになったことです。この教会は、戦時下厳しく迫害され、数名の牧師、信徒はそのために獄中で命を失っています。総督府の奨学金を受けた者は、卒業後、教師となることを義務づけられていましたので、先生は台湾に帰って義務を終えられた後、広島文理科大学に進み、更に学者としての道を歩まれました。広島で原爆に遭っておられます。先生の学者としての業績は、広く知られています。私たちはそれをいくら賞賛しても賞賛し尽くし得るものではありません。当時日本の大学で、文科系で博士号を得るのは大変なことで、その上、女性蔑視の時代に女性として最初の博士号を得るのは想像を絶する大変なことでした。更に覚えたいことは、先生が日本統治下の、台湾出身であったことです。当時、韓国、朝鮮、満州と共に、台湾人は日本の第二国民とみなされるという屈辱的な差別のもとにありました。それを有り難いと思えと言って押し付けられたのです。しかし、先生はキリスト教信仰によって、そのような理不尽も与えられた十字架として背負って歩まれました。荘司先生は、天に宝を積むようにと神様からの声に従って、学者として歩まれました。父上の儒家思想では、「徳をもって恨みに報いよ」と教えられていますが、キリスト教では、「汝の敵を愛せよ」といわれています。「天の父が完全なように、あなたがたも完全であれ」といわれています。父の教えとこの聖書の言葉を信じて生きられました。荘司先生は、日本から受けた屈辱的な痛みから逃

げたのではない。忘れたのではない。荷ない、忍耐しながら、見えるものにではなく見えないものに目を注ぎ、それについては口に出して言われなかったのです。だからといって、隠したのではありません。言わない方を徳とされたのです。損得の得ではない。人徳の徳です。先生は、人生の三分の一を強制的に日本人として生きさせられ、残りの三分の二を自発的、積極的に日本人として生きられました。最高の日本人として生き、徳をもって報いられました。戦争中にクリスチャンを迫害した軍に対して、フレーベルの平和教育をもって対抗し、平和を愛する日本人の心を信じ、日本人となって実際に生きられました。だれよりも日本人として、日本人らしく生きられました。日本の女性、教師、学者として生き通されました。私共は今、そのような荘司先生の信仰的な、また、学問をもって探究された真理を身をもって具現されたご生涯を今一度覚え、感謝して先生を天にお送りいたしましょう。私共もいつか天に行かなくてはなりません。そのとき荘司先生は天にあって私共を待っておられます。荘司先生は、例の調子で、質問されるでしょう。「あなた、どう生きてきたの？」と。その時先生に喜んで頂けるような、お返事が出来るような歩みをしてまいりましょう。そのように心から願いつつ先生を、天にお送りしましょう。

（広島流川教会牧師）